グリムの語り手たちとそのレパートリー

第 3 部

小 澤 俊 夫

第5章　ハクストハウゼン Haxthausen 家の人びと

1809年，ヴィルヘルム・グリムは，心臓病の治療のため，ハレを訪れ，ライル教授の治療を受けた。そして，カッセルで知り合いになった宮廷楽士長ライヒァルト Reichardt の家庭で，古いヴェストファレンの貴族の一門であるヴェルナー・フォン・ハクストハウゼン Werner von Haxthausen と知り合いになった。ヴェルナーは，同年デルンベルク Dörnberg でおきたフランス軍に対する反乱のかどで，故郷を追われていたのである。

1811年，ヴェルナーは，ヴェストファレンのベーケンドルフ Bökendorf の両親のもとに帰り，ヴィルヘルム・グリムを招待した。ヴィルヘルムは招待を受け容れ，途中のヘクスター Höxter では，若き日の友人パウル・ヴィーガント Paul Wiegand を訪れ，そこから，徒歩でベーケンドルフ入りした。

ハクストハウゼン家では，ヴェルナーとアウグスト August の兄弟はもちろんのこと，ふたりの姉妹，ルドヴィーネ Ludowine とアンナ Anna も歓迎してくれて，ヴィルヘルムは楽しい出会いの体験をした。その頃のことを，ヴィルヘルムは，兄ヤーコプにこう書き送っている。

「あの人たちは，メルヒェンや民謡，伝説，ことわざなどをたくさん知っています。ぼくはたくさん書き留めました。夕方，みんなで小さな公園とその近くの森へ行きました。でも，夕食後には，夜おそくまで歌いました。兄弟は狩りの角笛を吹き，アウグストはフリュートを吹きました。そして娘さんたちは歌いました。いくつかの民謡は特に美しいメロディーでした。」

そして姉妹も，ヴィルヘルムの伝説とメルヒェンに対する熱意に応えるようになった。ヴィルヘルムは，この後，1813，1815，1817年に，くり返しベーケンドルフを訪れている。

ヴィルヘルムは，ハクストハウゼン家とのつきあいのなかで，ドロステ・ヒュルスホフ Droste-Hülshoff 家の娘たちと知りあった。その母親のテレーゼ Therese が，Haxthausen 家出身だったのである。ドロステ・ヒュルスホフ家は，夏を母親の実家であるベーケンドルフですごすのが常であった。

姉のイェニィー Jenny・ドロステ－ヒュルスホフは，メルヒェンにたいへん強い興味をおぼえ，ヴィルヘルムにいくつものメルヒェンを書き留めては送っている。妹のアネッテ Anette は1813年7月にヴィルヘルムと知りあい，彼に対してはげしい恋におちた。ヴィルヘルムは女性に対してたいへん用心深かったので，この恋は片思いに終った。その頃の事情を思わせるものに，1814年1月12日付，ヴィルヘルムがルドヴィーネ・フォン・ハクストハウゼンにあてた手紙がある。

「N嬢について，ぼくは最近，奇妙な，こわい夢をみました。彼女が，深紅の服を着ていて，髪の毛を一本一本抜いて，それをぼくめがけて投げるのです。するとみんな矢になってとんできて，もしほんとうなら，ぼくはたちまち目をつぶされるところでした。」

ヴィルヘルムが，アネッテの積極的な求愛にたじたじとしている様子がうかがえる。しかし，いずれにせよ，アネッテは，グリム兄弟へのメルヒェン提供者として，大きく貢献したのである。

1818年，アネッテは，姉イェニィーと父親と共に，カッセルのグリム宅を訪問し，ヤーコプおよびルートヴィヒとも知りあいになった。もちろん，妹のロッテとも友だちになったのである。そして，グリム一家と親しかったハッセンプフルーク家の姉妹とも親しくなった。特にイェニィーとアマーリエ・ハッセンプフルークは生涯の親友となり，イェニィーの婚家先のメールスブルク Meersburg でアマーリエも没し，ふたりの墓は並んで立っているほどである。

ハクストハウゼン家の若者たちにせよ，ドロステ－ヒュルスホフ家の娘たちにせよ，自分が聞きおぼえているメルヒェンを送ったというより，馬丁や召使い，女中などからの聞き書きを送ったものが多い。メルヒェンのテキストの純粋性という観点からすれば，ここにすでにひとつのフィルターがかけられていることが想像できるのである。グリム兄弟に送るのには，どの話がよいかという取捨選択がそこでおこなわれていたであろうことは，十分想像できるからである。

第1節　アウグスト・フォン・ハクストハウゼン August von Haxthausen (1792～1866)

KHM 10番「ならず者」Das Lumpengesindel, 1812年5月19日，アウグストによって，「パーダーボルン地方より」として提供された。おそらく，アウグストにより，低地ドイツ語から手入れされたものであろう。1812年版からこの位置。1857年版まで保持されている。主人公はおんどりとめんどり。二羽が宿屋の主人を針などで苦しめたあげく，宿代もふみ倒す話。幸福に至らず。

KHM 58番「犬と雀」Der Hund und der Sperling の注釈。グリム兄弟は，58番の話の第3の類話として，ゲッティンゲン Göttingen の話をあげているが，それが，アウグストの提供した話と考えられる。主人公は小鳥と小犬。小鳥が仲間である小犬の仇を討つ話。

付録19番「からす」Die Krähen　これは1815年の第2巻初版では12番，第2版（1819年）以降第4版（1840年）まで107番。第5版（1843年）に至って，ホルシュタイン地方の「ふたりの旅人」Die beiden Wanderer にとって代わられた。メクレンブルク Mecklenburg 出身の兵隊が語った話をアウグストが記録して，1813年12月20日，グリム兄弟に送ったもの。付けた手紙にはこう書いてあった。

「およそ二週間前，私が夜衛の立ち番をしていたとき，相棒にメルヒェンを語ってもらいました。それを書き留めたのが，同封のものです。その三日後，この語り手は，クルヴェンシークの会戦で，私のまうしろで銃弾を受けて死にました。それゆえ，このメルヒェンは，私にとってとても忘れ難いものです。」

1822年のグリム注釈書によると，それは次のような話であった。

召使いが主人に，木にしばりつけられる。夜な夜なその木の下に集る悪霊たちが，木の下に生えている草を食べると，目が見えるようになると話している。召使いは自分を治してから，金持ちの娘の目を治して，彼女を妻にもらう。召使いの以前の主人が同じ幸神を手に入れたいと思い，その木の下に行く。夜になると悪霊が来て，主人の目をくり抜いて奪う。主人公は召使い。幸福な結婚と，まねした者の不幸な結末。

第2節　ルドヴィーネ Ludowine (1795～1872)

KHM 52番の複合話「つぐみひげの王さま」Konig Drosselbart 1810年版ではハッセンプフルーク家の話であったが，1812年版では，ドルトヒェンの話の終結部が付加された。つぼをこわしたり，妻に恥をかかせるのが，「つぐみ

ひげ」自身となったのである。1819年版からは，さらに，ルドヴィーネの話を加えて，少し長くなった。主人公は王女。苦難を経て幸福な結婚。

KHM 91番「地もぐりこびと」Das Erdmänneken（方言）1814年5月，ルドヴィーネはこの話をグリム兄弟に送った。1815年版で5番として収められ，1857年版まで同位置で保持。主人公はおろかな末弟。王女を救出して結婚。

KHM 96番「三羽の小鳥」De drei Vügelkens（方言）1813年8月2日，ヴィルヘルムは，ケーターベルク Köterberg への遠足をし，そこで，「羊飼いに古いお話を聞かせてくれとたのんで」，この話と他にいくつかの話を聞かせてもらった。それは，ヴィルヘルムとルドヴィーネの方言による聞き書きとして残され，本文となった。1815年版（10番）以来同じ位置を占め，1857年版まで保持される。主人公は三人娘の長姉。王と結婚。

KHM 113番「ふたりの王子」De beiden Künigeskinner（方言）1815年版から同じ位置。1857年まで保持される。主人公は王子。王女と結婚。

KHM 142番「ジメリ山」Simeliberg 1815年版から同じ位置。1857年版まで保持される。96番同様，1814年5月にルドヴィーネが，ミュンスターラント Münsterlandのケーターベルクの話によって書き記したもの。主人公は兄と弟。

KHM 200の9番「天国の結婚式」Die himmlische Hochzeit の注釈。「ミュンスターラントから」とされている話が，ルドヴィーネ由来のもの。主人公は百姓の息子。死んで永久の結婚式に出席。

第3節　マリアンネ Marianne 夫人（1755～1829）

KHM 59番「フリーダーとカーターリースヒェン」Der Frieder und das Catherlieschen の注釈？　注釈の中で「ディーメル地方から」aus den Diemelgeganden とされている話が，マリアンネ夫人からのものと考えられているが，確実ではない。

KHM 141番「小羊と魚」Das Lämmchen und Fischchen 1815年版以来同じ位置。1857年版まで保持される。マリアンネ夫人は，幼い頃，この話を，リッペ伯爵領 Fürstenthum Lippe で聞いたおぼえがあるという。主人公は幼い兄と妹。小羊と魚に変身させられたが，人間にもどって，森の中の家で平和にくらす。

第4節　ハクストハウゼン家の誰かによるもの（なかでもアンナ Anna 1800～1877によるものが多いと考えられる）。

KHM 1番「蛙の王さま」Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich の注釈中，三番めにあげられている話（パーダーボルンから）。

KHM 4番「怖さを習いにでかけた若者の話」Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen の注釈の中で，「パーダーボルンから」とされている話が，ハクストハウゼン家の誰かによって提供されたと考えられる。

KHM 6番「忠実なヨハネス」Der treue Johannes の注釈の中で，「パーダーボルンからのもうひとつ別の話」とされているのはハクストハウゼン家の人から寄せられた話である。

KHM 7番「うまいあきない」Der gute Handel 1819年版からこの位置に収められて，1857年版まで保持される。(1812年版の7番は154番へ移動）ハクストハウゼン家の誰かが，パーダーボルンからとして寄せてきたもの。おそらく，彼らによって低地ドイツ語から標準ドイツ語に訳されたものと考えられる。主人公はおろかな百姓。ユダヤ人にだまされそうになるが，結局勝つ。

KHM 16番「三枚の蛇の葉」Die drei Schlangenblätter 1819年版からこの位置。1857年版まで保持される。クラウゼ老曹長から寄せられた話と，ハクストハウゼン家の誰かが寄せた話の複合。主人公は若者。裏切った妻は流される。

KHM 21番「灰かぶり」Aschenputtel の注釈中，パーダーボルンよりとされている話。

KHM 24番「ホレ婆さん」Frau Holle の注釈中，パーダーボルンよりとされている話はハクストハウゼン家の誰かによるものと考えられる。

KHM 27番「ブレーメンの町楽士」Die Bremer Stadtmusikanten 1819年版から同じ位置で，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の誰かから寄せられた二話による複合話。主人公は動物たち。住み家を得て幸福にくらす。

KHM 31番「手なし娘」Das Mädchen ohne Hände の注釈中，パーダーボルンの話とされているのは，ハクストハウゼン家の誰かから寄せられたもの。

KHM 45番「おや指小僧の旅」Daumerlings Wanderschaft 1819年版以降，ヘッセンの話と，ハクストハウゼン家の誰かが寄せた話が複合され，1857年版まで保持される。主人公はおや指小僧。無事親元に帰る。

KHM 48番「老ズルタン」Der alte Sultan 1812年版ではクラウゼの話だったが，1819年版で，ハクストハウゼン家の誰かが寄せたパーダーボルンの話によって補強された。1857年版まで保持される。主人公は老犬，知恵で狼に勝

つ。

KHM 57番「金の鳥」Der goldene Vogel の注釈中，パーダーボルンよりとされている話。

KHM 60番「ふたりの兄弟」Die zwei Brüder この話の基本構想は，パーダーボルンよりとされる，ハクストハウゼン家の誰かの話である。1857年版まで保持される。主人公は兄と弟。兄を弟が救い，兄は妻のもとに帰ることができる。

KHM 64番「金のがちょう」Die goldene Gans の注釈によれば，ハクストハウゼン一家の誰かによる，パーダーボルンの話との複合。1857年版まで保持される。主人公は三人兄弟のおろかな末弟。王女との結婚。

KHM 65番「千枚皮」Allerleirauh ハクストハウゼン家の人は，1815年以前に，パーダーボルンよりとして，これの類話をグリム兄弟に寄せている。そして1822年以前になり，もう一度別の類語を寄せている。しかし，いずれも，本文には利用されなかった。

KHM 70番「三人の幸福な子ども」Die drei Glückskinder 1819年版から，「オーカーロー」Der Okerlo に代ってこの位置におかれ，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の誰かが寄せたものである。主人公は，3番めの少年。猫によって城が破壊されて終る。少年の幸福を特に言わない。

KHM 71番「六人が世界をのし歩く」Sechse kommen durch die ganze Welt の注釈にあるパーダーボルンからの類話は，ハクストハウゼン家の人によってもたらされたもの。

KHM 72番「おおかみと人間」Der Wolf und der Mensch これはハクストハウゼン家の誰かによってもたらされたもので，1819年版で，この位置におかれ，1857年版まで保持される。主人公はおおかみときつね。強さを誇るおおかみが，きつねにそそのかされて人間に襲いかかり，ひどい仕打ちをうけて，自分より強い者がいることを知る。

KHM 73番「おおかみときつね」Der Wolt und der Fuchs の注釈にある第四の類話は，ハクストハウゼンの誰かが1822年以前にもたらしたもの。

KHM 82番「道楽者ハンスル」De Spielhansl

注釈中，パーダーボルンの話とされている類話は，ハクストハウゼン家の誰かが送ってきたものである。

KHM 86番「きつねとがちょう」Der Fuchs und die Gánse

この話は，ハクストハウゼン家の誰かが，パーダーボルンからの話としてグ

リム兄弟に仲介したものである。ところが，1812年クリスマスに出版された初版本には，注釈だけが印刷されていて，本文はなかった。出版社の誤りである。本文は1813年初頭になってやっと刷り上り，書店に残っていた本に挿入されるという失態を演じた。ヴィルヘルムはこの件について，1813年3月12日に，アウグスト・フォン・ハクストハウゼンあてに手紙を書いている。この話は七つの版を通じて，つねに第一巻の末尾を飾っている。それは，話の最後のことばが，メルヒェンがまだ続くことを暗示しているからである。「みんながお祈りを終えても，メルヒェンはもっと語りつづけなければなりません。なにしろ，みんな，いつまでもお祈りをやめないのです。」主人公はがちょう。知恵によって，きつねに食べられることを防ぐ。果てなし話となっている。

KHM 97番「生命の水」Das Wasser des Lebens

1815年版以来同じ位置。1857年版まで保持される。ヘッセン国のメルヒェンとの合成。ヴィルヘルムが1813年7月25日，ベーケンドルフで，ハクストハウゼン家の人たちのなかから聞きだしたのである。主人公は三人兄弟の末弟。苦難を経て王女と結婚。

KHM 98番「もの知り博士」Doktor Allwissend

注釈中，パーダーボルンにて，とあるのはハクストハウゼン家の誰かからの類話であると考えられる。

KHM 99番「ガラスびんの中の精霊」Der Geist im Glas

1815年版では9番，1819年版では（第一巻86話との合本にもかかわらず）95番とならず99番となる。1857年版まで保持。ヴィルヘルムはこの話を，1813年7月24日，ベーケンドルフで，「とがった顔をして，口もとに好色さのただよう仕立屋」から聞き書きした。主人公は若者。びんの中の精霊を出してやり，お礼に万病をなおす膏薬を得て，世界に有名な医者になる。結婚でない幸福。

KHM 101番「熊の皮を着た男」Der Bärenhäuter

1815年版の15番には，「緑の服を着た悪魔」Der Teufel Grünrock という題名で，ハクストハウゼン家の人がパーダーボルンの話として送ってくれたものが収められていた。現在の KHM 101 番の話は，1843年（第5）版に至ってはじめて収められたものであるが，それと比較すると，1815年版の15番は，熊皮のモティーフが欠けていること以外，ほとんど現在の 101 番と一致している。現在の101番は，グリンメルスハウゼン Grimmelshausen の小説「最初の熊皮を着た男」Der erste Bärenhäuter によって改造されたものである。グリンメルスハウゼンの小説は，ハクストハウゼンの話にすでに影響を与えて

いたと思われる。主人公は除隊した兵隊。悪魔との契約で，熊の皮を着たが，世界を廻ったあげく，美しい若者にもどり，三人娘の末娘と結婚。

KHM 106番「貧しい粉屋の小僧と小猫」Der arme Müllerbursch und das Kätzchen

注釈中，パーダーボルンからのもうひとつ別の話とあるのは，ハクストハウゼン家の人によって，1822年以前に寄せられたものである。それは，1812年に，ヨーハン・グスターフ・ビュッシング Johann Gustav Büsching によって刊行された「パッデのメルヒェン」Mährchen von der Padde と，重要なモティーフが一致する。著作物からの間接的影響があったことを示す例である。

KHM 110番「いばらの中のユダヤ人」Der Jude im Dorn

これは，1618年の「ある百姓の召使いの物語」Historia von einem Bawrenknecht, アルプレヒト・ディートリヒ Albrecht Dietrich 作，という喜劇が下敷きになっている。僧侶がユダヤ人に変身するモティーフは，ヘッセンの口頭伝承と，パーダーボルンの口頭伝承にもあらわれている。後者は，ハクストハウゼン家の誰かからのものと思われる。

KHM 112番「天国のからさお」Der Dreschflegel vom Himmel

1815年版（26番）からこの位置。1857年版まで保持される。1813年6月15日，ハクストハウゼン家の人によって，ベーケンドルフから送られたものである。主人公は百姓。ほらばなし。

KHM 121番「何もこわがらない王子」Der Königssohn, der sich vor nichts fürchtet

ハクストハウゼン家の人から委せられ，1819年版以降，「天国の結婚式」Die himmlische Hochzeit に代わってこの位置。1857年版まで保持される。主人公は王子。こわさを知らないために，呪われた王女を救出して結婚。

KHM 123番「森の老婆」Die Alte im Wald

1813年7月23日から26日の間に，ハクストハウゼン家の人から送られたもの。1815年版以来同じ位置で，1857年版まで保持される。主人公は若い娘。小鳩の導きで，森の老婆の指輪を奪うことによって，小鳩を呪いから救い，その王子と結婚。

KHM 126番「忠実なフェレナントと不実なフェレナント」Ferenand getrü un Ferenand ungetrü

1815年版以来この位置にあり，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン

家の人から送られた。その際，「多分，このメルヒェンは完全ではないでしょう」という添え書きがしてあった。(BP Ⅲ，18ページ）主人公は著者，王妃と結婚。

KHM 129番「腕きき四人兄弟」Die vier kunstreichen Brüder

1815年版ではこの位置（第二巻の43番）に「ライオンとかえる」という寓話があったが，1819年版からこの話がこの位置を占めるようになった。ハクストハウゼン家の人から送られたものである。1857年版まで保持される。主人公は四人の若者（兄弟)。名人技を身につけ，王女を救う。四人が平等の功績を主張し，結局，王女と結婚せず，王国の半分を四人でもらうという幸福で終る。

KHM 131番「美しいカトリネリェとピフ・パフ・ポルトリー」Die schöne Katrinelie und Pif Paf Poltrie

1812年5月27日，ハクストハウゼン家の人から伝えられた話。1815年版からこの位置（45番）を占め，1857年版まで保持される。主人公は若い娘と求婚者。連鎖譚に似た，問答譚。結婚に至らず。

KHM 132番「きつねと馬」Der Fuchs und das Pferd

1815年版（46番）以来この位置。1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人から伝えられたミュンスター Münster の話。1814年10月13日，ヴィルヘルムからヤーコプあての手紙に「ハクストハウゼンから送られた話，特に，新しいきつねのメルヒェン」ということばがある。主人公はきつねと馬。老いぼれて捨てられた馬を，きつねがトリックでライオンを退治したようにみせかけ，主人から大切にされるようにしてやる。馬にとっては幸福な終結。

KHM 133番「ダンスですりきれたくつ」Die zertanzten Schuhe

注釈書中に，パーダーボルンの話とあるのは，ハクストハウゼン家の人からのもの。本文はミュンスターラント Münsterland の，ドロステーヒュルスホフ家から寄せられたものである。

KHM 134番「六人の召使い」Die sechs Diener

1815年版（48番）からこの位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人から送られた，パーダーボルンの話。主人公は王子。六人の特殊能力のあるけらいによって難題を解決し，王女と結婚。

KHM 135番「白い嫁と黒い嫁」Die weiße und die schwarze Braut

1815年版（49番）以来この位置にあり，1857年版まで保持されているが，この話は，ハンス・ルードルフ・フォン・シュレーター Hans Rudolf von

Schröter から寄せられたと思われるメクレンブルク Mecklenburg の話と，ハクストハウゼン家の人から寄せられたと思われるパーダーボルンの話による合成である。主人公は王女。にせの王女にとって代わられて，鴨に変身するが，王が真の嫁として発見してくれて結婚。

KHM 138番「クノイストと三人の息子」Knoist un sine dre Sühne

1857年版（52番）からこの位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼンの娘たちの誰かが，ザウアーラント Sauerland のゲフェリンゲン Gevelingen で方言のまま聞き書きして，アウグスト・フォン・ハクストハウゼン August von Haxthausen が送ってくれたもの。主人公は，身体に障害のある三人の息子。障害ゆえに不可能なことをしてしまう，倒錯した話。ほら話である。

KHM 139番「ブラーケルの小娘」Dat Mäken von Brakel

1815年版（53番）以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人により送られてきた，パーダーボルンの話。主人公は娘。娘の願い事を聞いた僧侶が，おまえには男はさずからないと言うと，娘が悪口を浴せかける話。笑い話である。

KHM 140番「一族」Das Hausgesinde

1815年版（54番）以来この位置を占め，1857年版まで保持される。1812年5月27日，ハクストハウゼン家の人から，パーダーボルンの話として送られてきた。同家の人はこれの類話を他にもいくつか送ってきている。1750年には，標準ドイツ語で書かれた話が出版されている。主人公は，いなか者の女ふたり。一種の連鎖譚。結末なし。

KHM 143番「旅にでる」Up Reisen gohn

1815年版ではこの位置（57番）に，「ひもじい子どもたち」Die Kinder in Hungersnoth があったが，1819年版からこの話が入り，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人から送られた，方言のままのミュンスターラント Münsterland の話。この他に1822年以前に，パーダーボルンの話も送られてきた。主人公は，おろかな若者。挨拶のことばが一段階ずつづれているためにひどい目にあう。日本では，「段々の教訓」といわれる話。

KHM 149番「うつばり」Der Hahnenbalken

1815年（63番）以来この位置を占め，1857年版まで保持される。本文は，フリードリヒ・キント Friedrich Kind (1768～1843) の詩による。注釈書中，パーダーボルンの話とされているのが，ハクストハウゼン家の人によって提供

されたものと考えられる。当然1822年以前である。

KHM 158番「のらくら国の話」Märchen vom Schlauraffenland

1815年版（67番）以来この位置を占め，1857年版まで保持される。本文は，14世紀，中世ドイツ語で書かれた詩。注釈中，パーダーボルンの類話とあるのは，1822年以前にハクストハウゼン家の人から送られたもの。

KHM 200番「子どものための聖者伝」Kinderlegende の1「森の聖ヨーゼフ」Der heilige Joseph im Walde

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人によってもたらされた，パーダーボルンの話。

KHM 200の2番「12人の使徒」Die zwölf Apostel

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人によってもたらされた，パーダーボルンの話。注釈書では，「ドイツ伝説集」298番と関係ありとされている。

KHM 200の3番「ばら」Die Rose

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人によってもたらされた，パーダーボルンの話。「ドイツ伝説集」264番，265番参照。

KHM 200の4番「貧しさと謙虚さがあれば天国へ行ける」Armut und Demut führen zum Himmel

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人が送ってくれた，パーダーボルンの話。

KHM 200の5番「神さまのごちそう」Gottes Speise

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持されている。ハクストハウゼン家の人から送られた，パーダーボルンの話。注釈書中にある民謡「ああ，歌を聞こうとする人は」は16世紀のものである。

KHM 200の6番「三本のみどりの枝」Die drei grünen Zweige

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人から送られた，パーダーボルンの話。予言者のことを言っているのは，からすに食べさせてもらったという，旧約聖書のエリアのこと。

KHM 200の7番「聖母マリアのさかずき」Mutter Gottes Gläschen

1819年版以来この位置を占め，1857年版まで保持される。ハクストハウゼン家の人によって送られた，パーダーボルンの話。

付録22番「兵隊と指物師」Der Soldat und der Schreiner

1815年版では44番だった。ハクストハウゼン家の人の世話で入手できたものと思われる。1815年版の注にはこう書かれている。

「(ミュンスターラント Münsterland のもの) なかなか良いし，メルヒェン風でもある。しかし全体として欠点があるようにみえる。欠落があったり，混乱していたりする。」

その不完全性ゆえに，1819年版には採用されなかった。1815年，ヤーコプはヴィルヘルムあての手紙で，「もっともだめな話で，除去したいと思う」と述べている。

付録23番「汚い男」De wilde Mann

1815年版では50番，1819年版から1843年の第5版までは，同位置の136番。第6版から除去された。ハクストハウゼン家の人が送ってきた話。「灰かぶり」の男版である。

第5章のまとめ

以上の諸話を，保持された度合いによって分類してみる。まず，分類規準とその記号を明らかにしておく。

A　なんら手を加えられず，最初の聞き書きのまま1857年版まで保持されたもの。

B　手は加えられたが，1857年版まで保持されたもの。

C　手を加えられたが，1819年（第2）版では姿を消したもの（1812・15年版までしか採録されなかったもの。および以後は注釈書に入れられたもの）

D　1812・15年（初）版に採録されなかったもの（注釈書にのみ入れられたものを含む）。

E　本文にも注釈にも記録されていないが，1812年版の本人使用本に名がメモとして記されているもの。

F　第3，4，5，6版のいずれかで姿を消したもの。

各章で述べた語り手たちのレパートリーをこの規準で分類すると，以下の如くである。主人公と話の結末も付記し，誰の話と交代したかも，判明する限り付記することとする。

アウグスト

アウグストが送ってくれた話は3話にすぎず，1857年版まで保持された話は1話にすぎない。

1857：10番。B，主人公はおんどりとめんどりで，結末は幸福ではなく，宿屋の主人を苦しめたまま終る。

1857：58番の注釈中の類話。D，主人公は小鳥と犬。小犬が仇を討つ話。

付録19番。F，主人公は召し使い。幸福な結婚と模放者の不幸な結末。

第1・第2章で調査した，都会の上流階級に属する家庭の娘たちの話とは，たいへん趣きが異なることがわかる。しかも，後二者は第7版まで残らなかったのである。

ルドヴィーネ

1857：52番「つぐみひげの王さま」B，ハッセンプフルーク＋ドルトヒェン＋ルドヴィーネ。王女。幸福な結婚。

1857：91番「地もぐりこびと」B，主人公はおろかな末弟。王女を救出して結婚。

1857：96番「三羽の小鳥」B，主人公は姉娘。王と結婚。

1857：113番「ふたりの王子」B，主人公は王子。苦難の末に王女と結婚。

1857：142番「ジメリ山」B，主人公は兄と弟。弟は幸福を得，まねした兄は首をはねられる。

1857：200の9番「天国の結婚式」D，主人公は百姓の息子。死んで永久の結婚式に出席する。

マリアンネ夫人

1857：59番「フリーダーとカーターリースヒェン」の注釈中の類話，D。

1857：141番「小羊と魚」B，主人公は幼い兄と妹。小羊と魚に変身させられたが，人間にもどって森の家で平和にくらす。

ハクストハウゼン家の誰か。

1857：1番「蛙の王さま」の注釈中の類話，D。

1857：4番「怖さを習いにでかけた若者の話」の注釈中の類話，D。

1857：6番「忠実なヨハネス」の注釈中の類話，D。

1857：7番「うまいあきない」，B，主人公はおろかな百姓。ユダヤ人にだまされそうになるが，結局はユダヤ人をへこませる。

1857：16番「三枚の蛇の葉」B，クラウゼ老曹長の話との複合。主人公は貧しい息子。裏切った妻は死ぬ。

1857：21番「灰かぶり」の注釈中の類話，D。

1857：24番「ホレ婆さん」の注釈中の類話，D。

1857：27番「ブレーメンの町楽士」B，主人公は動物たち。住み家を得て幸福にくらす。

1857：31番「手なし娘」の注釈中の類話，D。

1857：45番「おや指小僧の旅」B，主人公はおや指小僧。無事親元に帰る。

1857：48番「老ズルタン」B，主人公は老犬。知恵で狼に勝つ。

1857：57番「金の鳥」の注釈中の類話，D。

1857‥60番「ふたりの兄弟」B，主人公は兄と弟。兄，王女と結婚。

1857：64番「金のがちょう」B，主人公はおろかな末弟。王女と結婚。

1857：65番「千枚皮」の注釈中の類話，D。

1857：70番「三人の幸運な子ども」B，主人公は少年。幸福は言わず。

1857：71番「六人が世界をのし歩く」の注釈中の類話，D。

1857：72番「おおかみと人間」B，主人公はおおかみときつね。おおかみが自分より強い人間がいることを知る。

1857：82番「道楽者ハンスル」の注釈中の類話，D。

1857：86番「きつねとがちょう」B，主人公はきつねとがちょう。がちょうが知恵で自らの生命を救う。

1857：97番「生命の水」複合してB，主人公は末弟。王女と結婚。

1857：98番「もの知り博士」の注釈中の類話，D。

1857：99番「ガラスびんの中の精霊」B，主人公は若者。有名な医者になる幸福。

1857：101番「熊の皮を着た男」F，主人公は除隊兵。末娘と結婚。

1857：106番「貧しい粉屋の小僧と小猫」注釈中の類話，D。

1857：110番「いばらの中のユダヤ人」の注釈中の類話，D。

1857：112番「天国のからさお」B，主人公は百姓，ほらばなし。

1857：121番「何もこわがらない王子」B，主人公は王子。王女と結婚。

1857：123番「森の老婆」B，主人公は娘。王子と結婚。

1857：126番「忠実なフェレナントと不実なフェレナント」B，主人公は若者。妃と結婚。

1857：129番「腕きき四人兄弟」B，主人公は四人兄弟。王女と結婚せず，王国を半分もらう。

1857：131番「美しいカトリネリエとピフ・パフ・ポルトリー」B，主人公

は娘と求婚者，連鎖問答譚。

1857：132番「きつねと馬」B，主人公はきつねと馬。きつねの知恵で馬が幸福になる。

1857：133番「ダンスですり切れたくつ」の注釈中の類話，D。

1857：134番「六人の召し使い」B，主人公は王子。王女と結婚。

1857：135番「白い嫁と黒い嫁」複合してB，主人公は王女。王と結婚。

1857：138番「クノイストと三人の息子」B，主人公は身障三人息子。ほら話。

1857：139番「ブラーケルの小娘」B，主人公は娘。笑い話。

1857：140番「一族」B，主人公はいなか者の女がふたり。連鎖譚。

1857：143番「旅にでる」B，主人公はおろかな若者。段々の教訓。

1857：149番「うつばり」の注釈中の類話，D。

1857：158番「のらくら国の話」の注釈中の類話，D。

1857：200-1番「森の聖ヨーゼフ」B。

1857：200-2番「12人の使徒」B。

1857：200-3番「ばら」B。

1857：200-4番「貧しさと謙虚さがあれば天国へ行ける」B。

1857：200-5番「神さまのごちそう」B。

1857：200-6番「三枚のみどりの枝」B。

1857：200-7番「聖母マリアのさかづき」B。

付録：22番「兵隊と指物師」D。

付録：23番「汚い男」F。

各人の話の保持された度合いをまとめると次の如くである。

アウグスト

B＝10番

D＝58番

F＝付録19番

ルドヴィーネ（—印＝結婚）

B＝52，91，96，113，142番（計5話）

D＝200-9番

マリアンネ夫人

B＝141番

D＝59番

ハクストハウゼン家の誰か（—印＝結婚）

B＝7, 16, 27, 45, 48, 60, 64, 70, 72, 86, 97（複合），99, 112, 121, 123, 126, 129, 131, 132, 134, 135（複合），138, 139, 140, 143, 200-1, 200-2, 200-3, 200-4, 200-5, 200-6, 200-7番（計32話）

D＝1, 4, 6, 21, 24, 31, 57, 65, 71, 82, 98, 106, 110, 133, 149, 158, 付録22番（計17話）

F＝101，付録23番

ハクストハウゼン家の人びとの寄与した話の数はきわめて多いことがわかる。そして57年版まで保持された率も高い。これを示すと次の如くである。

アウグスト　3話，うちB＝1（33.3%）

ルドヴィーネ　6話，うちB＝5（83.3%）

マリアンネ夫人　2話，うちB＝1（50%）

誰か　51話，うちB＝32（62.7%），D＝17（33.3%）

グリム兄弟がハクストハウゼン家の人びとと知りあったのは1809年以降，特に1811年以降であるから，KHM 番号の大きい数をもつものが多いのは当然であるが，120番台，130番台に集中していることが特に目立つ。つまり，KHM 第二巻にとって，ハクストハウゼン家の人たちは，直接の語り手ではないにしても，重要なる提供者だったことがよくわかるのである。

下線を施した番号は，結末において，王女または王子との結婚が成就した話である。若い娘ルドヴィーネのB話が，すべてそれに該当することは興味ある点である。初期の語り手であるグレートヒェンやドルトヒェン，マリーなどのばあいと似ている。これらの話がKHMの性格に強く影響していたのである。

下線の施された話は，ハクストハウゼン家の誰かが話したものにも，8話ある。これらについても上述のことと同じことがいえよう。

参考文献

1) Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen, Band 1～3, Stuttgart 1880 hrsg. Heinz Rölleke

2) Johannes Bolte・Georg Polivka: Ammerkungen zu dcn KHM der Brüder Grimm, Band 3, Hildesheim 1963（BP Ⅲと略す）